
現世の剣 -Currental Bladers-

あらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現世の剣 - Currental Bladers -

【Nコード】

N3350R

【作者名】

あらん

【あらすじ】

かつて、この世に生きる戦士達に数多の勝利を導いてきた、旧時代の名剣達が存在した。だがどれも最期には主の死のみが待ち受けていた。忠誠を誓うべき主を失い、存在意義を失い、旧時代の名剣達はやがて強大な力の「塊」へと変わり果てていった……。そしてこの平和な現代、未だ彷徨い続ける「塊」を救うべく戦い続ける者達が、「現代剣」を手にする者たちがいた。とある高校生・兼平綾もまた、「現代剣」を手には日々戦っている一人である。『ソードイアン・ソウル』シリーズの双璧の片方たる作品。クイツ

クロツドさんが執筆する小説、『剣と扱い手達の戦い』の『隣の世
界』で繰り広げられる物語！！ 『剣と扱い手達の戦い』 [http:
//ncode.syosetu.com/n4201r/](http://ncode.syosetu.com/n4201r/)》

序章

赤、^{あか}

紅、^{あか}

朱、^{あか}

緋、^{あか}

長い長い階段から見える光景は、炎の地獄だった。

熱気がここに充満していた。

激しく燃え盛る炎が、化け物のようにうねり、全てを飲み込んでゆく。

木でできた昔ながらの家々も、青々と生い茂っていたはずの樹木も、そして『ここ』に住んでいた人間達も、何もかもが赤く染まる。家が崩れ、樹木が焼け落ちる音はまるで轟音だ。人々の悲鳴は、まさに断末魔そのものだ。

もはや生^{せい}など存在しない。人も、自然も、絶望するほどの死があった。

しかし、

一部の人間は例外だった。

ボデイガード、いやSPと呼ぶべきだろうか。そういう人間が身につけるような黒のスーツの男達数名が長い石垣の階段を上っていた。この炎獄の中、マスクも付けずに。既に熱風で息をするのも辛

いはずである。しかし彼らは平然としていた。

そしてもうひとつ。

彼らは、黒スーツにまるで似つかわしくない、機械的な造りをした『剣』を握っていた。

「止まれ」

階段を登りきると、黒スーツの男達に囲まれていた、四十歳ほどの男が声を発した。低い声だった。彼は灰色のスーツを身に纏っている。そして彼もまた、不思議な形状の『剣』を手にしていた。

黒スーツ達はすぐに足を止めた。

目の前には、今では業火に包まれ、見る影も無くなった神社が建っていた。周囲の木々も完全に炎にのまれていた。

いつ崩れ落ちてもなんら不思議じゃないそこに、灰色のスーツの男は迷わず歩きだす。黒スーツは一応事前に今回のことについて聞いていたが、やはり火だるまと化した神社の本殿に何の躊躇いも見せず突き進む行為に驚きを隠せなかったようだ。

神社の本殿の前まで進み、男は足を止めた。異常な熱気を物ともせず、ただ直立する。

そして、右手にある『剣』を、その切っ先を、本殿に向けた。

バオウー！ という轟音と共に、本殿が熱風で吹き飛んだ。数メートル後方に待機していた黒スーツ達は吹き飛ばされないよう両足に力を込めているだろう。本殿の前にいた灰色のスーツの男は、火の粉が目に入らないよう、『剣』を持っていない左手で顔を隠すだけだった。

熱風が収まり、男は左手を下げる。先ほどまで本殿があったところに視線を向け、そして……

それを目の当たりにした。

「……………見つけた……………！」

今まで無表情だった男の口が、歪いびつに歪んだ。

表のいつも1

眠い。

枕に顔を埋めながら、兼平綾かねひらあやづという少年は半覚醒状態の頭で思った。

夏休みという学生の極楽も数週間前に過ぎ去ったこの九月上旬。未だに暑さ全開の太陽の光が部屋の窓から差し込み、ベッドにクリーンヒットしている。睡魔と暑さの同時攻撃がじわじわと体を蝕む。

普段ならカーテンが日差しを完全防御してくれるのだが、悲しいことに、先日部屋の中で竹刀を振っていたら不幸にも破いてしまった。窓は開けていたので無事だったが。そのため現在日差しを遮るものは何も無い。

それはまだ良い。現在感じている睡魔とは関係ないのだから。

問題は昨晚である。

とても蒸し暑かったのだ。睡眠中にエアコンをつけるのは健康上よろしくないということは既に承知の上なので扇風機で我慢しているのだが、その扇風機を上回るほどの暑さだった。

昨晚は忙しかつたこともあって寝るのが遅くなったのだが、あまりに暑くて全く寝つけない。最終的に眠れたのは、たしか深夜三時辺りだったろうか。

とにかく、暑くて眠い。

それが今朝の少年の心境である。

「(……いつそ床で寝るか)」

半覚醒状態の頭がほんの少しだけ働き、脳みそが電気信号をのろのろと発信し、体をのそのそと動かす。

体を横にしたままベッドの端っこまで進むと、ポテッ、と床に落下する。腰から落ちたので少しお尻が痛い、この睡魔が消え去ってくれるのなら何だっていい。

一緒に落ちてきた枕を頭の下に置く。

床ってこんなにひんやりするものだったのか、と率直な感想を体全体で感じる。冷たい床が蒸し暑さで火照った体温を吸収してくれる。

ようやく眠れる。兼平綾の意識は徐々に薄れていった。

「おっはよー朝だよ綾ちゃんツ!!」

バン！ と勢いよく開いたドアが顔面に直撃した。

「ごっほおおおおおおああああアアアアアアアアアアッ！
」

正確には鼻だった。

完全に夢の中に入る直前だったので予想だにしていなかったダメージである。

鼻頭を押さえ少年は、先ほどまで心地良い冷たさを感じ取っていた床の上でのたうち回る。

「おおおっほほほほほほおおおおお!!」

「お？ どうしたの綾ちゃん」

ちよっぴり涙まで出てきそうなのを堪え、鼻を押さえたままドアを開いた張本人の顔を見上げる。

悪戯っぽい子供のような笑みを浮かべている少女が仁王立ちしていた。

肩まで届く程のショートヘアで、左右の、耳より少し上の部分を黒いリボンで髪を結んでいる。『ツインテール』というやつなのだろうが、そもそも長い髪ではないためテールになっていない。そういうファッションなんだろうか。

服装は白をベースとした半袖のセーラー服、スカートは紺色である。

わたなべ みお
渡辺美緒。隣に住む、ひとつ年上の幼馴染である。

「ひとん家の部屋のドアをおもいつきり開ける奴がどこにいるか！」

「何で鼻赤くなってんのよ？」

「お前が開けたドアが直撃したんだろっがよ」

「あー。でも何で床に転がってたのさ？ ベッドはどうしたベッドはー」

むっ、と綾は押し黙ってしまふ。『暑さに耐えきれなかったので床で寝たら冷たくて快適なんじゃないかと思って』なんてバカ正直に言えるわけがない。

「う、腕を使わずどこまで行けるのか自分の限界を知りたかっただけだな……」

「結果、部屋に出ることすら叶わなかったと。それはとても残念な限界だねー」

なんか余計に惨めな思いをしてる気がする。
ため息ひとつつきながら、美緒はスカートのポケットからティッシュを取り出す。

「ほらほら、バカなことやってないで早くしよ。ほら鼻血拭いて」「え、鼻血出てる?」

「もう、朝から何やらしいこと考えてるのよ」

「直前の出来事忘れてないか美緒さんよ」

「……さあ朝ごはんよー」

そう言い残してさっさと部屋を出ていく美緒。

綾は受け取ったティッシュを一枚丸め、右側の鼻に詰める。

「あ、鼻血出てるんの左側だからね」

「ツわかつとるわ!」

ひよこつと顔を出し戻ってきた幼馴染を大声で一蹴する。

本当は素で間違えたのだがもちろんバカ正直に以下略。

もう一度詰めなおし、今度は鏡で確認する。結構強くぶつけたはずだが、鼻は既に赤みが引いていた。

打ちどころが良かったのだと、綾は適当に考えた。

軽く顔を洗い、さっさと着替えた。

白のカッターシャツに真っ黒のスボン。綾が通う高校の制服だ。

女子のセーラー服は県内でもそこそこ人気のデザインらしいのだ

が、男子は別段珍しくもなんともない学ランである。夏服にいたってはただの真っ白なシャツだ。簡素にして簡潔。まあ所詮は制服なので、特にこだわりなど無いのだが。

携帯電話と財布、家の鍵をズボンのポケットにつっこみ、筆箱とノートのみ入った軽い鞆を掴んで部屋を出る。階段で一階へ降り、居間へと向かう。

台所と向かい合う、幼馴染の美緒みおの姿があった。階段から彼女の味噌汁を注ぐ様子が伺える。食卓には白ご飯、納豆、玉子焼きにウインナーと朝食の定番が並んでいた。

綾はそんな食卓に近寄り、手始めに綺麗な黄色をした玉子焼きを手でつまみ、口に放り込んだ。いつもと違う、ほんのり甘い味がして、綾は少し驚く。

「へえ、今回は砂糖あ痛っ」
「くらー！」

後ろから頭を軽く叩かれた。振り返ると、頬を小さく膨らませた美緒がアップで映る。味噌汁が入ったお椀を左手に、右手は腰にあてていた。

「もう、あなたの朝ごはんなんだから、つまみ食いしなくたって逃げはしないわよ」

「どうせ俺の腹の中に入るんだし、いいだろひとつくらい」

「行儀悪いって言うてるの。ほら、お味噌汁」
「おう」

味噌汁を受け取り、綾は食卓に着く。改めて朝食のラインナップを眺め、

「いただきまあむ」

先ほどの注意などお構いなしな挨拶をし、先ほどつまみ食いした玉子焼きをもう一個口に入れた。やはり甘い味わいが口に広がる。向かい合うように座った美緒が何か言いたげだったが、気にしないことにする。

「いつものダシじゃないんだな」

「玉子焼き？ うん、今朝はウインナーをちよつと濃いめにしたから」

へえ、と頷き、件のウインナーを箸でつまんだ。何気にタコさんである。よく見るとカニさんまで皿に乗っている。

口に入れて噛むと、ピリツとした辛さが肉汁と一緒に広がった。濃いめとは言ってもくどくなく、白米が進む味だ。ピリ辛とはこのとかと綾は納得する。

「たしかに意外と辛い」

「別に辛子とかは使ってないけどね」

「なのにこの辛さなのか？」

「むふふ、知りたい？」

美緒がにやりと笑いながら顔を近づける。

綾はウインナーと白米を飲み込み、冷たい麦茶を一口飲むと、ただ一言。

「遠慮しとく。料理ってガラじゃねえしな」

「つれないな」

「お前の飯が食えるだけで充分だよ」

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃないの。そういえば、今朝の」

「はんはどう？」

「いつもと同じだな」

味噌汁を啜る綾に、美緒はふてくされたような表情を浮かべた。

「たまには『美味しいよ美緒お姉ちゃんっ』って素直に言えないわけ？」

「ない」

ひどーい、と口を尖らせながら美緒は席を立ち、台所の蛇口を捻る。ウインナーを炒めたフライパンを洗うのだらう。何だかんだ言っつてこの辛口ウインナーはかなり好みだな、と思いながら綾は箸に挟んだそれを口に放ると、

「『いつもと同じように美味しい』って意味に決まってるんだろ」

と若干吐き捨てるように告げた。

泡まみれのスポンジを持った手を止めて美緒が振り返るが、黙って口を動かし気付かない振りをする。

「そっか……」

顔を見らずとも、綻んだ表情が想像できた。それほど嬉しそうな声で美緒は答えた。

「ふふっ。そっかそっかー」

「なんだよ」

「いいえ何もー？」

くるりと台所に振り返り、洗いものを再開する美緒。よく聞くと

鼻歌まで歌っているようだ。

「（ガキかよ、ったく）」

ぶっきらぼうな言葉と裏腹に、いつのまにか最後の一個となっていたウインナーをありがたく頂戴した。

「そついえばおじ様は？」

「親父？」

もう洗いものを終えたのか、美緒はタオルで手を拭きながら席に戻る。

「いつも通りだな。会社で寝泊まり継続中」

「大変だねー」

「別にそうでもないだろ。こないだ一日だけ帰ってきたときなんかケロッとしてたぞ」

「もう、会社の社長さんだから絶対疲れてるわよ」

「そっかー？」

「そつよ」

社長。

綾の父は『兼平カンパニー』を統べる社長だ。

自動車や船、航空機などの輸送機械を手掛ける大企業で、近年ではリニアモーターカー、果てにはロボットなんかも開発しているらしい。その影響で有能な技術者なども集まり、科学技術も向上。今ではNASAに匹敵する科学技術を持つと言われており、あらゆる部門を幅広く手掛けている。この日本でもぶっちぎりのトップなのだという。

「そんなすごい会社の息子とは到底思えないわねえ」

「うるさいな。別に俺は関係ねえだろ」

「親不孝者め」

「こっちの台詞だ。金持ちがほぼ一人暮らしなんかするかよ」

一流企業の息子 綾はそっぽを向く。

一人で暮らすには広すぎるこの家。とは言っても豪邸なんかではなく、一般より少し大きいだけの一軒家だ。

父は仕事でほとんど家に帰らないため、この家で生活しているのは実質綾だけだ。家政婦も雇っていない。

料理を作る人間もない。綾は男子高校生らしく料理などできないため、お隣に住む幼馴染の美緒が毎朝朝食を作ってくれるというわけだ。

「美緒がいなかったら今頃餓死してたな」

「それは嬉しいけどさすがに餓死はないでしょ。悪く言っつもりはないけど、お金あるんでしょ？」

「銀行に振り込まれているのは普通に暮らす分だけだ。一般の高校生と大して変わらないぞ」

「そっなの？」

「じゃなかったら今頃お城に住んどるわ」

大げさなんかではない。

例えでもない。

それほど、兼平カンパニーは大きな財力を誇っている。

「ごちそうさん」

時計は既に八時前を差していた。

綾は床に置いてあった軽い鞆を掴む。美緒も食卓の上の食器を片

づけると身支度をする。綾が居間のドアに手を掛ける直前で、突然くるっと振り返る。

危うく『日課』を忘れるところだった。

居間には襖で仕切りがしてある空間があり、そこは大きな長方形の机と座布団、テレビなどが置いてある。

あと十分で遅刻ギリギリになりそうなのでテレビなんかには用はない。

襖を開け、奥に進む。

仏壇があった。

大部分が金色で塗られた、高級そうな仏壇。綾と後ろについてきた美緒は目の前で正座し、そこに立てられた小さな写真に視線を向ける。

毎日やっているというのと今朝は時間的余裕がないということがあって、軽く手を合わせ、

「今日も行ってくるな、お袋」

今は亡き母親に挨拶をした。

表のいつも2（前書き）

高校を卒業し、日本へ帰国しました。
これからはたくさん執筆できるぜ！

表のいつも2

綾^{りょう}たちの通う私立東明学院高校は、家から徒歩十数分の場所にある。

県内でもトップを争うほどの進学校。中高一貫であり、綾は中学からエスカレーター式で通っている。制服のシャツをズボンに入れておらず、中に黒いTシャツを着た格好だが、一応は大企業の御曹司なのである。

ちなみに、美緒は高校受験で入学した。中学は別々だったものの家は隣同士なので毎日のようにあっていたが、当時の彼女は毎日目の下にクマが出来ていた、『勉強で死ぬかと思った』と口癖のように呟いていたのを思い出すに、相当努力したのだろう。

「じゃ、またね」

昇降口で上履きに履き替え、噂の美緒が手を振った。

二年生である彼女の教室は東棟だ。一年生である綾の教室はここ西棟にあるため、ここで一旦別れることとなる。

「ああ。今夜、飯食いに行くから」

「きつとだよー？」

「わーってるよ」

お気楽な声を発し、笑顔で別れる美緒を見送る。

綾は携帯電話に視線を移した。

八時二十八分。

「……呑気に喋りながら歩くからだよ、馬鹿」

ここのところ忙しかったので、美緒が朝食を作りに来る時以外ではここ一週間顔を合せなかった。そのせいか、今朝の登校では美緒の口はなかなか閉じられなかった。積もる話でもあったのだろうが、内容は他愛もない世間話。まあ、つまらなくはなかったし、迷惑だとも思わなかったのだが。むしろ逆だ。

さて、遅刻寸前とは言っても、教室はひとつ上の階なので、正直一分も掛からない。焦る必要はないぜとでも言いたげな欠伸をひとつし、綾は上靴に履き替える。

昇降口のすぐ隣は階段。急ぐ必要のない理由のひとつである。階段を上れば、部活の朝練があったのか、大急ぎで廊下を走る奴らばかりだった。

みんな熱心だなあ、と心の中で呟き、綾は駆け足の生徒の中にいる知り合いに軽く挨拶をし、一年B組 綾の教室の前で立ち止まり、

びしゃり。

突然扉が閉まった。

「お？」

おかしい。まだチャイムが鳴るには三十秒くらいあるはず、そして今日は日直ではないはず。

そんな思考に駆られた綾に、

「おーっす綾、おはよう。今日も良い天気だな」

教室の窓がガラツと開く。そこから顔を出している人物に、綾はげんなりとした。

この一年B組の担任にして日本史教師の、やまのうち山之内慶司けいじ。

灰色のスーツの中に黒のシャツ、ネクタイは真っ赤。それらはまだ良いが、髪型は渋谷の若者もびっくりな金髪で、右耳にはピアスを二つ付けており、何より男の綾から見ても相当イケメン。最近のホストでも中々見かけない美形がそこにいた。

一言で表すなら、チャライ。現在浮かべている笑みも爽やかだが、やはりチャライ。

「うつす先生。相変わらず指導されそうな格好してんな」

「そう褒めるなって」

「褒めてねえよ。教師が指導されてどうすんだ」

「今日は新しいピアス付けてみたんだが、カツコイイだろ？」

「聞けよ。というか中に入れてくれ、遅刻する」

教室の扉の取つてをガチャガチャと動かすが、なかなかビクともしない。恐らく鍵を掛けるのだらう。

イケメン教師山之内は、先ほどまでのチャラ笑顔から打って変わって真面目な表情になり、

「朝補習はどうした」

「……………あ」

そして綾は思い出した。

先週から始まったこの二学期だが、一年生は今月から補習が開始するのだ。先週は始業式やら二学期最初の授業やらで説明だけで終了したので、実質本日月曜日から開始することとなる。

ここ東明学院には『朝補習』と『放課後補習』があり、生徒はど

ちらかを選択しなければならぬ。朝練がある部活組は必然的に放課後補習を、その他部活動員や帰宅部組は放課後自由に過ごしたいため朝補習を選択する傾向がある。もちろん全員というわけではないが。

綾は朝早く起きるのが苦手なので迷わず放課後補習を選んだ。
が、

「先生が無理やり朝に変えたんだろうがよ。俺は出ないぞ」
「何故だ」

「眠いからだ」

「幼馴染わたなへとイチャラブしたいからだろ」

「違うわー!!」

「ったく、これだからスタイル抜群のお姉ちゃん系幼馴染を持つ奴は」

「や、まあ、確かに美緒、出るところかなり出てるけどさ……」

って何言わせんだっ。

と、朝っぱらから変な思考に向かわせた教師を思いっきり睨みつける。

「教室に入れる」

「朝補習」

「明日から出るから」

「マジだな？」

「マジだ」

「じゃあ許す。だが遅刻判定にするからな」

その山之内の台詞と同時に、ホームルーム開始のチャイムが廊下に鳴り響いた。

今までの会話で時間を稼がれた気がしないでもないが、とりあえ

ず何も言わずに綾は扉を開ける。鍵は既に解除されていた。

「ほら、席着け。それとちゃんと閉めろよ」

「へいへい」

教卓に戻るイケメンの小言を適当に流し、しかし言われた通り扉を閉める。

「ひゃぶっ!?!」

ガンッ!!-- と扉の向こうで何かが衝突する音が鳴った。

「うおっ、何事!?!」

ちょうど扉に手をつけていた綾は、突然の衝撃で引っ込ませたが、すぐさまそれを開く。

一人の女生徒が扉の前でしゃがみこんでいた。さらさらとした黒のロングヘアート、少し触れると折れそうな細い腕が印象的な少女が、恐らく思い切りぶつけたのであるうおでこを涙目でさすっている。

綾は彼女を知っている。

「大丈夫かよ、長瀬^{ながせ}」

「ふええ……あ、か、兼平くん?」

長瀬愛子^{あいこ}、それがこの少女の名前だ。クラスの中でも、ほんわか

と優しさのある女の子だ。

「随分豪快に衝突したなあ。愛子も遅刻か？」

山之内も気になって再び教卓からやって来たようだ。ちなみに彼は自分の生徒を下の名前で呼ぶ。

「違います……って、先生がわたしに職員室から出席簿取りに行くように指示されたんじゃないですか！」

「あーそうだったそうだった」

「お前ほんとに先生かよ」

「教師に向かってお前とはなんだ綾。罰として、放課後愛子と教室の掃除な」

「はあ？ 何で」

「ちいーこおーくうー」

間延びした声で挑発する山之内。とてもむかつく。しかし、一応遅刻したのは事実。

「もう一人の日直はどうしたよ」

「あ、えっと、今日は風邪でお休みみたいです」

愛子が答えた。

なるほど、今朝は長瀬が日直か、と綾は納得する。

「しゃーない。掃除くらいならいつか」

「よく言った。さすがは俺の綾だ」

「そういう発言は誤解されるからやめろ」

「あの、きよ、教室に入りたいんですけど……」

「ん、おお悪い悪い。早く席に着け」

愛子から出席簿を受け取り、再び教卓に戻る山之内。綾たちもそそくさと席に着く。一番左隅が綾、その隣が愛子の席だ。

「んで、大丈夫かよ、おでこ」

数年に一、二回あるかないかの豪快な衝撃だったので、さすがに気になった綾は愛子の顔を覗きこむ。

「ほうっ！？ ハ、ハイだいじょおびです！！」

「なんだその声。それにちゃんと覚えてないぞ……もしかして言語機能に影響が……」

「ひどいっ！？ それは言いすぎです兼平くん！」

「冗談だつて。痣になってないみたいだし、良かったよ」

「あ、りがとうございます……」

何やら顔が赤くなっているが、綾はまあ大丈夫だろうと結論付けた。

「もっと注意しろよ。怪我したら大変だからな」

「あ……はい。りよ、りようかいですっ」

照れくさそうにはにかむ愛子。

先ほどまで赤く腫れていたおでこは、既に引いていた。

表のいつも3

「やっぱ綾しよ一人で掃除な」

いきなり理不尽なことを言ってくれる山之内に、さすがの綾もキレる寸前に。

しかしどうにか怒りの衝動を抑え、

「理由を、聞かせてもらおうか」

「いじわる」

「ぶっ飛ばすぞ!？」

キレた。

「冗談だって。ちょっと愛子を借りるだけだ」

親指で背後を指す山之内。そこには長瀬愛子がいた。日誌と黒板用の三角定規、そしてメンズファッション雑誌を細い両手で抱えている。前者は彼女が日直だからわかる。中者は、山之内は日本史担当のはずだがなぜここにあるのだろうか。後者にいたっては完全に山之内の私物である。

「荷物運びに使っただけじゃなーか」

「人聞きの悪いこと言うなよ。それにその後ももうひとつあるんだからよ」

「どんな」

「部活」

あー、と綾は納得する。

山之内の後ろに立っていた愛子が申し訳なさそうな顔で、

「すみません兼平くん。掃除お任せしちゃって」

「いいって。一分でちゃちゃーっと終わらせるから」

「汚れが少しでも見つかったら罰ゲームな。徳川家全員の名前覚えてこい」

「ピツカピカにしてみせます」

綾は暗記が苦手なのだ。

「んじゃ行くぞー愛子」

「は、はい。じゃあ、また後で」

「おう」

二人を見送り、教室は箒とちりとりを持った綾だけとなる。

掃除と言っても、雑巾がけするほど丁寧にする必要はないので、そこまで手間ではない。

「やるか」

誰に告げるわけでもなく、綾は黙々と箒を動かし始める。

時刻はすでに午後五時を回っている。

窓から差し込む日差しは、昼間と比べればかなり日が落ちてきたようだ。しかし暑さは弱まる気配がない。猛暑日といわけではないが、それでも暑さは八月とまったく変わらない。立ってるだけで汗が出る。

クーラーがあるだろう、という声が聞こえそうだが、たしかに設置されてはいる。しかし、近年の温暖化への対策として、朝のホームルームが始まる前と放課後は強制的に電源が切れるよう設定されているのだ。それも全教室の。最近の科学はすごい。ちなみに、放

課後教室に残る際にクーラーを使用する場合は担任の先生の許可が必要である。

それはさておき、掃除に集中する。消しゴムのカスや、シャーペンの芯とか、ノートの切れ端やら、弁当に入っていたバランなどをちりとりを集めてゆく。

意外とゴミが多い。もう少しきちんと扱おうとは思わないものかと、クラスメートたちの日頃の過ごし方に疑問を抱いてしまう。

「ま、そのための日直の掃除か」

俺は今日の担当じゃないがな、と嫌味を込めた独り言。

話は変わって、前から疑問だったのだが、このバランという緑色の物体はどういう用途があるのだろうか。煮物の煮汁が他のおかずやご飯に染み渡らないようにするため？ それならプラスチックの仕切りがあるタイプの弁当箱を使えば済む話である。しかも無駄なゴミも出ない。クーラーという便利なものを生み出したのに、どうして人間はバランなんていうあまり価値を感じられないものを作ったのか。バランがかわいそうじゃないか。というかそんな扱いでいいのかバランも。

至極どうでもいいことを考えてると、いつのまにか山之内が戻ってきていた。教室の扉に寄りかかっている。

「ちゃんとやってるじゃねえか。関心関心」

「……バランって、何のためにあるんだろうな」

「は？」

何言ってるんだコイツって顔をされてしまった。

綾自身も何言ってるんだ俺みたいな表情を浮かべる。

「もう用事終わったのか。長瀬は？」

「部活に行ったよ。……よし、こんなもんでいいだろ。もう終わっていいぞ」

山之内の指示も出たので、ちりとりのゴミをゴミ箱に捨てる。さらば balan。

「やーっと帰れるぜ」

「部活には顔出さないのか？」

「パス。疲れた」

「不良部員め」

「クビになつたからな」

机の上に置いていた、薄く軽いカバンを掴みながら綾は言った。山之内はやや呆れながら、

「……そうだったな」

「まあ、長瀬やみんなによろしく言っといてくれ」

「あ、ついでにこのゴミ箱のゴミも体育裏に持って行ってくれ」

「おい！」

「良いだろうそれくらい。どうせ帰るんだろ？」

ニヤニヤ顔の山之内に舌打ちしつつも、結局受け取ってしまう綾。頼まれたことはなかなか断りきれないこの性格をどうにかしたい。

「しかたねえな。んじゃまた」

「おっと待ちな」

箒とちりとりを掃除箱に仕舞い、いざ帰ろうとしたところを引き留められる。

まだ何かあんのかいいい加減にしろよ、とめんどくさそうな表情で

綾は振り返ったが、山之内が手にしていたものを見た瞬間それは消えた。

細長い形状の袋。剣道の竹刀を仕舞う『竹刀袋』と呼ばれるものだ。ただし、一般的な竹刀袋と違い、こちらは幅は二、三倍はある。竹刀も複数本入りそうだ。

「新品だ」

無言で受け取る。

意外と重い。

「……了解」

それだけ告げ、綾は教室を出て行った。

学校を出る頃にはもう六時になっていた。

まだまだ日が長いとはいえ、この時間帯になると空はオレンジ色に染まり始める。暑さも徐々に消えていくだろう。一日の至福である。

しかし暑いものは暑いので、コンビニでアイスでも食べながら帰宅したいが、綾はその欲を我慢する。

今朝の美緒に言った言葉を思い出す。

晩御飯が美緒宅で待っている。

綾のもうひとつの至福である。

「一週間振りだなー、おばちゃんの飯」

ワクワクを隠しきれない（隠す気もない）、子供っぽい表情で帰路を歩く。

美緒の母親の作るご飯は天下一品だ。美緒が作る朝食ももちろん文句なしだが、やはり母親にはまだまだ足元にも及ばない。『店で出してるのも美緒の母親がほとんど手掛けているほどだ。』

『今晚は何だろうなあ、フッフ』と徐々に気持ち悪い笑みに変貌していることに気付かない綾。

どんつ。

何かにぶつかつた。

「あうっ」

女の子だった。

十二歳くらいだろうか。幼く可愛らしい顔立ち、いわゆる童顔。身長も一五〇cmを下回ってるだろう。服装はノースリーブの白いワンピースだった。

何より印象的　いや異質なのは、灰色の髪の毛と、宝石のような赤い瞳。地毛だろうかと綾は一瞬考えたが、こげ茶色ならまだしも灰色は日本人であり得るのだろうか。赤瞳あかめも同じ、カラーコンタクトでもつけない限りありえない。外国人とのハーフなのだろうか。ぽてんと尻餅をつく様を見て、綾はあれこれ考えるのを止めしやがみこんだ。カバンと竹刀袋を地面に置く。

「悪いっ、大丈夫か？」

「……へー、き」

目に若干涙を溜めているが、少女は何かふんばって立ち上がる。

「ごめんな。兄ちゃんちょっと考え事してたんだ」

「やらしいこと……？」

「ちびっこのくせになんて思考に至るか。今日の晩飯のことだよ」

「でも、にやにやしてたよ？」

「……………」

そんなに怪しい笑みだったのかこれからは気を付けよう、なんてアホな反省をし、

「てか、夏とはいえこんな遅くまで外にいたらだめだろ？ 家に帰

りなさい」

「……………」

コクリと頷く女の子。

「素直でよろしい」

「すとーかー」しないでね？」

「またそういうこと言うか」

親の教育方針に疑問を感じてしまう。

「だれもいないところで、変な人にあつたら気をつけろって、テレビで言ってたよ？」

たしかに、この道は現在人がいない。夕焼け空も相まって、薄暗い路地も出てき始めている。子供にとっては不気味だろう。

しかし、

「何をっ！？ 見なさいこの制服を俺は高校生だ変な人じゃない！」
「なんだ」
「このちびっこめ。とにかく、もう遅いから早く帰りなさいっ」
「うしろから抱きついたりしないでね？ けーさつさん呼ぶから」
「す、る、か、よ、そんなこ」

瞬間。

怒号が静かな路地に鳴り響いた。
二人がいた地面は、大きく抉り取られ、跡形もなく吹き飛んだ。
抉られた地面を例えるならそう、挽肉のよう。
そして、黒い炎のようなものを纏った大きな手を始め、その輪郭を露わにしていく。例えるならそう、

ゆらゆらと揺れ動く

悪霊^{バケモノ}。

表のいつも3（後書き）

『表のいつも』はこれにて終了です。
次回からの『裏の顔』をお楽しみに。

裏の顔1 (前書き)

今回はルビがたくさんあるため、パソコンから読むことをお勧め
します

裏の顔 1

全長は大雑把に見ても軽く五メートルは越えている。

体全体を構成してる、炎のようにゆったりと揺れ動く黒い瘴気。不快感をひと時も休まずに醸し出している。

顔と思われる部分も当然黒い瘴気に塗りつぶされており、おぞましいほど赤いふたつの眼だけが浮かんでいた。足はない……いや、胴から下がない。まるで幽霊のように半透明だった。

そう、幽霊。それとも悪霊と呼ぶべきだろうか。

それが、アレを表現するのに一番適している。

地震が起きてるわけではないのに、周囲の地面が静かに震動する。声の無い怒号を発している。あまりにも異質で、現実からかけ離れた存在。

薄暗い路地、人がいないのが不幸中の幸이었다。

いや。

つい直前まで、悪霊の目の前にいた。

二人。

今はコンクリートが抉り取られた跡のみがある。悪霊が出現したと同時に、瘴気の腕によつてできた、ひどく雑なクレーターだ。

当然二人の姿はない。肉片すら残らず吹き飛ばされたのか。

否。

「つぶね……！」

悪霊よりも、クレーターよりも数メートル先、綾と少女、二人とも生きていた。少女は綾の左腕にぎゅっとしがみついている。外傷は見られない。

綾の右手には、山之内から受け取った竹刀袋が。

「まったく、まだ”認証”やってないんだから、いきなり出てこられるとすっぱー困るんだよ」

先ほどの衝撃でボロボロになった竹刀袋の布を掴み、勢いよく引き裂く。

竹刀袋に包まれていたのは、剣道によく使用される竹刀なんかではなかった。

剣。

機械的な造りの、剣。

純白の柄、刀身は黒く、両側の刃の部分は赤い。サイズは長くも短くもない、綾の腕や体にぴったりの長さ。

引き抜いた機械の剣を前に構える。少女を左腕で抱えているため、空いた右手でしっかり握りなおす。

「悪い。何にも見えなくて少し怖いかもしんないけど、すぐ安全なとこ連れてくからな。何なら、俺が良いと言うまで目を閉じてくれ」

「わたしだいじょうぶ」

「強いんだな」

「でも、うん……目、とじてる」

そう言っつて少女は強く両目を閉じ、綾の肩におでこを押し付ける。綾は悪霊に向き直る。

既に先ほどのクレーターからこちらへ移動しているのが確認できた。

「そう急かすなよ、すぐ楽にしてやるから
生命力、認証開始」

その声を同時に、機会の剣は動き出す。剣を握っている右腕が、ほのかに青白く光りだした。その光は柄を伝い、剣全体を包む。漆黒の刀身に、青白い稲妻模様が浮かび上がる。

すると、ピーという機械的な音が鳴った。

生命入力
Current Word Mark 2
現代式生命剣式型

《Ryo Kanehira》
起動

認定完了

男性なのか女性なのか区別できない、無機質なAI。

最後の一言で、青白いオーラが刀身を薄く包んだ。

臨戦態勢。

綾のそれを悟ったのか、黒い悪霊の巨大な腕が振り下ろされた。

先ほどと劣らぬ、唸りを上げる攻撃。当たれば骨ごと潰されてしまっただろう。

それを、綾は右手に持った機械の剣の鎬 刀身の刃ではない平らな部分 で受け止めた。

意外と威力が高かったのか、両足が数センチコンクリートに沈む。しかし、先にも言ったように、臨戦態勢である綾の体に異常はない。当然、少女にも危害が及ばないよう努める。

巨腕を右へ払い、綾は少女を抱きかかえたまま跳躍する。そのまま、機械の剣によって強化された右足で、黒い悪霊の顔 とかわれる を蹴り上げる。

呻き声のような不協和音が綾の耳に鳴り響くが、止まらない。

「がら空きだ」

既に悪霊の頭上まで迫っていた綾は、右腕の剣を掲げる。

そのまま垂直へ振り下ろす。
しかし、薄く青白い光を纏った刀身は、黒い腕に辛うじて防がれる。いや、切り落とされはしたが、それが勝敗の決めてになるにはほど遠い。

「チツ、やるじゃん……」

心にもない賞賛だ。

しかし意外と余裕がない。

実際、あの悪霊は大したことない。

力任せなだけで、速度は無いに等しい。

だが、初めて人を抱きかかえながら戦闘を行っている綾にとってはそれなりに厳しい戦いだ。しかも抱きかかえてるのは女の子。

今の強化された腕に少しでも力を入れたら、少女はいとも簡単に肉塊へと変わってしまう。

両足と剣を持つ右腕にだけ集中するのは、思いのほか難しいのだ。気が付けば、悪霊が再びこちらへ迫って来ている。

そこで綾は閃いた。

だったら抱きかかえなければ良い。

「せいっ！」

気合いを入れた掛け声とともに右腕を振りかぶると、渾身の力で、

機械の剣を投げつけた！

剣は見事悪霊の左肩に突き刺さることに成功する。

そして、

「悪いちびっこ！ ちょっとふわっとくるぞーッ！ー！」

「え？ え……ひゃあああああッ!？」

左手と空いた右手で少女の胸を鷲掴み、今度は真上へ向かって放り投げた。体に害を与えない程度に。恐らく一〇メートルくらいは行ったのではないだろうか。

出会ってからおとなしめな表情を浮かべていたが、さすがにこればかりは慌てた顔に変化していたようだ。

その変化が可愛いと思いたいところだが、生憎今は非常事態。だが、それもすぐに終わる。

無事に（？）放り投げたことを確認し、綾は目の前に視線を戻し、両足に力を込め、再びジャンプする。

普通の間じゃありえない速度で悪霊に接近し、刺さっていた剣を引き抜く。

再び生命力が宿った剣で激痛が走ったのか、叫び声を上げる。

綾は着地し、今度は両手で握った剣を横に低く構える。

「……終わりッ！」

そして 下から上へ、斜め一線で斬り裂いた。

胸から霧のような瘴気が噴出し、体が砂塵のように崩れていく。その様子を素早く確認すると、綾は後ろへ一度下がる。

「 うひゃあああっ！」

「おっとと……！」

ナイスタイミングで落下してきた少女。

機械の剣を乱暴に地面に下ろし、両手で勢いを殺し抱きかかえる。落下するまでの数秒間でやるべきことを終え、放り投げた少女の回収も成功。

「おっす、ちびっこ。元気か？」

とりあえず明るく声をかけてみる綾。
だが少女の赤い瞳は冷ややかだ。

「……あんなことするなんて、聞いてない」

「言っていないからな」

「なんで？」

「ついさっき思いついたからな」

「ばかにんげん」

「何それ!？」

異形の存在から守ってくれた者に対する言葉じゃねえ、と文句を
言っただけかと思っただけ、

「って、お前には見えないんだっ」

「うん……?」

「なんでもない。ちょっとここで待ってな。できれば後ろ向いてて
くれ」

少女を下ろし、その頭をぼんぼんと撫でる。突然のことで少し慌
てるも、撫でられる感触に抵抗がないのか目を細める。

くるんと回り少女が後ろを向くのを確認すると、綾は転がってい
る機械の剣を掴み、振り返る。

今でも黒い霧を発散しているソレ。

その中央には、ドス黒く染まった、日本刀のようなものが見えた。
あれが、恐らく核^{コア}。

綾はそれに近づき、立ち止まる。

剣の切っ先を向け、

「
”救済”開始」

『 』
《Salvate》
『 』

綾の声と、剣の無機質な声が重なる。

刀身に刻まれた稲妻模様がひとときわ輝き出す。

そして、稲妻模様を境目に、まるで鰐ワニの口のように大きく開かれた。

その口が目の前の核コアである刀を、

文字通り、

救済喰ったした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3350r/>

現世の剣 -Currental Bladers-

2011年10月5日21時17分発行